

このレジメを書いている今日は、NY 時間で10月15日になる。日本への帰路に就く飛行機の中に居る。NY の風景が眼下に広がっている。眼下に広がる風景はどここの都市ともあまり変わらない様に感じるが、NY の街が放つ波動はすさまじかった。東京は日本の縮図と云われるが、NY は世界の縮図だ。NY の街は好き嫌いが、人によってはっきりと分かれると感じた。苦手な人は、二度と NY へは行きたくないと感じるだろう。日本とは全く文化が異なるからだ。片や自己主張の街、片や和合協調の街という、大きな違いがある。NY は移民問題、差別や格差、可能性やチャンスが入り混じっている、多様性の極みの場所である。個人主義の極みが集団を形成し、多様な要素を受け入れる土地を創り出している。

NY の地形は中州の構造になっている。古来より、中州は運河を作り、商業を発展させる土地となり易い。NY が世界の経済中心地なのは、土地の構造の影響もあるかもしれない。そんな個人主義の極みの集団の中に居ると、個人の中に芯が無いと、落ちるところまで落ちてしまう要素がある。様々な激しい刺激を受ける NY の街の中で、芯を持ち一貫性を確立していると、恐ろしくハイエンドまで昇りつめてしまう。あの小さな街の中に貧困層と富裕者層が入り混じっている。NY の人々はみんなアグレッシブだ。アメリカ経済が好調なのもあってか、街も人もエネルギーに満ち溢れている。逆説的に表現すると何があってもポジティブなエネルギーを発していないと、生きていけない街でもあるように感じる。

出張スケジュールの1日を視察日に当てた。ブロードウェイや有名な観光地には目もくれず、アップタウンからダウントウンまでの街並みの空気感を味わい、インフルエンサーとの会食の機会を得た。NY で実業家として49年の実績を持つ75歳の女性経営者との会食の機会を頂いた。NY の女性ドンと云われているそうだ。彼女曰く、NY には世界中の本物が集まってくる。政治家も実業家も芸術家も情報も、全てハイエンドを引き寄せるのが NY の街だ。その本物に触れているから自分も磨かれていった。これからは更に磨きをかけるんだ。そして私は NY への片道切符しか持ってこなかった。帰る場所があると思っていない。今ここが自分の存在する居場所だと思って生き抜いてきたから、今があると思うとおっしゃっていた。75歳の年齢とは思えないパワフルさとオーラを放っていた。存在そのものでハイエンドを引き付けてしまう。実業家50年と云う凄味も相まって、神々しささえ感じてしまった。NY という小さな街は、世界を動かしているトップランカーを引き付けてやまない場所のようだ。

別のインフルエンサーのご厚意で、ご紹介がないと内覧できない、一般公開しないミッドタウンの富裕者層向けのハイエンドマンションを内覧させて頂いた。中古マンションで、広さは100坪、販売価格は日本円で25億円。月の管理費が700万、年間管理費だけで8,400万のマンションだそうだ。二桁億の物件しか扱わないトルコ人の女性バイヤーに、売る気満々の本気のセールストークを受けた。プライベートとセキュリティが完全確保された空間を創り出しているのが売りだそうだ。50階から眺めるマンハッタンの街並みと、その隣にはトランプタワー。常時、そのマンションの5階には専属シェフ8名が居て食事はコースからアラカルトまで食べ放題、フィットネスセンター、エステルームが完備され、エステティシャンとトレーナーが専属で常勤しているらしい。この物件を安いと思って購入する富裕者層が NY には沢山いる。片や通りを数ブロック行くとホームレスの方も居る。色んなものが入り混じってカオスの状態だ。気を抜くとトコトン落ち続け、腹を決めればハイエンドの世界もある。そんな多様性の塊の個人主義を貫く、よい意味で何でもありの世界観の中で生活をする、多様性、つまり個の違いについて考えさせられる。NY では違いは違いでしかなく、それを受け入れている。ただ違うだけだよね、という感覚である。日本は島国なのも相まって、違いを打ち出すと軋轢を生んでしまう。それを恐れて個の主義主張を打ち出さない風習がある。個より集団を優先し、争いを避けてきた傾向がある。従って日本では、他者や一般社会通念と違うと「間違い」になってしまう。間違わないように個を殺して生きる文化が発達したように思う。そんな日本的な感覚でNY の時間を過ごすと、ふと、自分の存在とは何かを問われる機会が何度もあった。自分は何のために存在しているのか。何の役割があるのか。その役割を極めているのか、怠っているのか。。。今回は陰

陽五行論の観点から、存在の役割と二極論に関して考察してみよう。

存在の役割は大きく二分できる。潜在的役割と先天的役割である。先天的役割は宿命に定義され、個々人で変化する。その先天的役割は更に二分され、宿命に添った役割を果たすものと、宿命とは違う役割を意識的に担っていくものがある。陰陽五行論では陰占は役割、陽占は使命を示している。陰占は極微論、陽占は極大論で導き出すのを覚えているだろうか。陰占は生まれた時点で既にデフォルト値で貰っているものであり、陽占はそれが現実にエネルギー展開して命の使い方を示している。陰占はその

個人の存在理由、つまり今世の生きる理由、役割・役目を示している。ここで大切なのが潜在的役割である。これは全ての者に共通した役割である。それは「人は存在しているだけで役割を果たしている」という事である。生きているだけで意味があり、役割を果たして、何らかの形で直接的か間接的かで、他者や世の中の役に立っている。

陽転	陰転	在り方
担う	抱かない	
先天的役割		表層
潜在的役割		土台

何か特別なことをしなくてもいいのだ。それぞれが、それぞれの役割を、ただここに在るだけで果たしているのだ。その事が理解できていないと、何か成果を出さないといけない、期待に応えなくてはならない、役に立ってないと生きてはいけない、存在してはいけない、居場所が無いと感じてしまう。でも、本当はそうではない。潜在的役割の観点から論じると、「存在しているその事自体」が役割を果たしているのだ。これは何もなくていい、怠けていいと云っているのではない。どんな状況であろうが、どんな結果を突き付けられようが、それが自分の価値や評価ではなく、存在そのものに価値があり、意味がある事を理解しなさいと、陰陽五行論は説いているのだ。更に換言すると、存在そのものに意味があるという事を腑に落とすために、今の人生工程があり、今の体験があるのだ。その潜在的役割を土台として、先天的役割がある。前述した潜在的役割は誰しも、ただそこに存在しているだけで役割を果たしており、生きている意味があると説いた。それが役割の基本であり、誰にでも共通する役割である。その上に積み重なる役割が、各自に与えられた陰占で読み込む先天的役割である。この陰占で示された先天的役割通りに役割を果たす場合と、果たさない在り方の場合の2つがある。前者は宿命が開花し、後者は苦悩する。先天的役割は表面的な役割・役目なので、何を生きてもいいのだが、宿命が陽転するかしないかは、先天的役割を後天的な在り方で意識をしているかどうかで決まる。陽転をしたければ、宿命の陰占に示してある先天的役割を意識して生きる事が肝要である。役割を果たしていくと生き甲斐を感じる人生となり、役割を果たさないと生きている実感を得ることが出来ず、虚しさを感じてしまう。先天的役割は陰占の年干支、月干支、日干支の6文字から読み取っていくのであるが、これは個別のものなので、ここで詳細には触れないでおこう。大切なのは土台となる潜在的役割である。誰でも生きただけで意味があり、その役割を果たしているという観点である。この土台がしっかりしていないと、表面的な事ばかり追ってしまう事になる。自分は何のために存在しているのか、何の役割があるのか。それは今この瞬間を「ただ生きる」事に在る。生きているだけで、全ての者が役割を果たしている事を理解すべきである。例え、今、生き甲斐を感じていなくてもだ。人生が今、上手くいってなくてもだ。感じるのは認識でしかないの、役割を果たしている実感がなくとも、存在そのものが豊かであり、意味があり、価値がある。命を取られる以外は、かすり傷でしかない。どんな状況に置かれても、存在に意味がある事を認識した方が、人生が生き易くなるかもしれない。

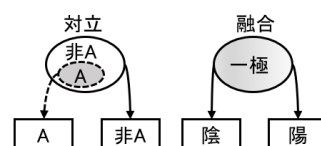
NY に出発する前の日に、東京のホテルで前泊していた。その日は珍しく TV の電源を入れて聞き流していた。NHK の番組だったと思うが、NY ヤンキースの松井秀喜氏が特集されていた。今は日本の家売って、NY に拠点を置いているという。特に NY にいる理由はないが NY ヤンキースから特別顧問的な役目も頂いているし、日本には出張という形で時折仕事をしに行くだけの生活だそう。NY での日々は子供と毎日遊び、別段トレーニングをするわけでもなく、ちょっと太ってきたなと思ったらウォーキングをする程度で、ただ NY に存在しているそう。不思議とそのシーンが心に残った。翌日、羽田から JFK 空港に到着し出国手続きをしていた時、二つ隣のレーンに敬虔なユダヤ人の男性が立っているのを目にした。年の頃は30代くらいであろうか。真っ黒の瀬高帽子に両耳あたりから垂れている長い髪。独特の風貌である。異様な存在感があったのを鮮明に覚えている。ふっと前日の松井秀喜氏のシーンとリンクした気がした。

何かを極めた者は、存在しているだけで、大きな影響を及ぼしていくと、ふっと、そんな言葉が下りてきた。松井秀喜氏はプロ野球を、ユダヤ人は宗教と世界経済を極めている。何かを極めた者の存在感は、何もしていなくても、存在そのものが大きな影響を放っている。人として存在しているとは、どういうことなのかを考えさせられる。一般的な平凡な生活、人生体験で生涯を終える者が8割。特異な存在として人生を生きていく者が2割だとこの学問は説いている。どちらの存在で生きた方が良いのかは、その人の好き好きだろう。正解はない。凡人は凡人の存在の役割があり、異常者は異常者の存在の役割がある。NY の街のエネルギーは、そんな人種を超えた個人の存在とは何ぞやと、問いかけてきているかのようであった。

善い意味で何でもありの世界観であった。リトルイタリー、リトルチャイナのブロックを練り歩き、ダウントウンの魚市場後でランチを頂いた。再開発が進みお洒落な港になっていた。対岸にはブルックリン。カフェの窓際には太陽の日差しが差してきた。NY の暗黒と栄華の両方を一挙に垣間見た気分だ。光と暗闇。どの町にも必ず存在する。どんな人にも清濁があるように。その光と暗闇の印影が、NY の街は如実にくっきりと見える街だ。アメリカは建国230年目になる。200年前には、ほぼ未開の地で、今日を生き抜こうとしてやってきた移民が沢山いたはずだ、この港を通して。そんな風景を思い浮かべてみる。2019年の今はお洒落なカフェや近代的なビルが立ち並ぶが、200年前には人種を問わず今日を生きるのが精一杯だったはずだ。不平不満など云う余裕さえなく、必死の覚悟で生き抜いていた人たちが、そこには居たはずだ。そんな光と暗闇、栄華と暗黒、陰と陽が入り混じるダウントウンの港を眺めると、無性に涙が出てきてしまう。全ての存在には陰と陽があり、その陰陽の狭間から、その存在の風景を眺めると云いようもない感情が溢れてしまう。どんな人にも存在する意味があり、その存在には陰と陽がある。この陰と陽は西洋と東洋では大きく意味合いが違う。

西洋にも東洋にも二極論がある。それは全く異質な二極論であることをご存じだろうか。西洋哲学の二極論はデカルトに代表されるものである。A と非 A という構造である。つまりある事象に A と定義を与えたら、その A 以外は全て非 A の存在であるという事である。一つの事象を A と非 A に二分し、A と非 A は異質なものであるから、融合できず、結果的に対立を生む。

個々人は別の存在であるという思考である。これに対し東洋哲学の二極論は一極



二元論に代表されるものである。陰と陽は表面的には全く異質な存在として表れるが、その根本は一つであるという思想である。一つの事象は表面的には二元(二極)に対立して異質な存在としてバランスを取ろうとするが、その根本は一極で繋がっており、融合していると説いている。これはどちらが良い悪いと言っているのではなく、二極論の根本的思想が全く違うという事をお伝えしたいのである。どちらが好きかは好みの問題であるが、この陰陽五行論は明確に東洋哲学であり、一極二元論を説いており、一見対立して見える相違な事象は実は根本では融合しており、根源は同じものから派生しているだけである。つまり不二であると説いている。もしこの一極二元論の立場に立つと、どんな多様性も根本的には一つの源から派生しているだけであるから、違いを受け入れられるはずだと説いている。融合するから、争い、比較する必要がないではないかと云っているのだ。つまり絶対的な世界観に立脚している。人種、文化、社会地域という目に見える表層的なものは違っていても、人間と云う根本は全く同じだと説いている。会社組織の役割も同じである。組織で表現すれば、社長、幹部、部長、平社員、協力会社、お客様は一見立場や利害が違う様に見えて、実は根本では一つの存在であるから、仕事と云う東方仁徳は、まず他者にお尽くしする事が仕事の基本だと定義している。夫婦で云えば、夫と妻は表面的には相反する役割に見えても根本は同じだ。だから家庭、プライベートを意味する西方義徳は、筋を通して裏切るなど説いている。同じ存在だから裏切る必要はないではないかという思考だ。様々な事象を、この一極二元論で紐解くことが出来る。すると、どれだけ違って見えても、根本は同じであると捉えることが出来ると、見えてくる世界観が変化するかもしれない。

この役割を、一極二元論で表現すると、陰と陽と一極の三者の役割が存在する。今世、陽の役割を果たすのか、陰の役割を果たすのか、その根本の源である一極の役割を果たすのかは、その時代と環境とが

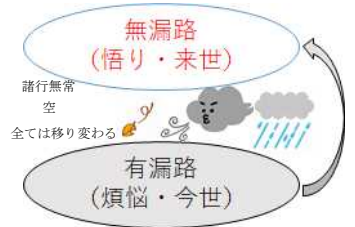
その個人の宿命に合致するか、そして後天的にその個人がどんな在り方で今この瞬間を生きているかで決まる。くどいが、どれが良い悪いと論じているわけではない。それぞれが、それぞれの役割を持っており、その役割を果たした瞬間に生きている実感、生き甲斐を味わうのだ。その役割を果たしていない瞬間に、生きている実感がなく、生き甲斐の無い今を味わうのだ。改良方法は簡単である。今、自分が活かされている時代と環境の流れを大運法と位相法から読み、自分の陰占に示された役割を受け入れ、ただただそれを愚直に実践すればいいだけである。存在そのものが役割であると説いているのだ。どんな存在でも、存在していることに価値と意味と役割があるのだ。

今月のテーマは存在の役割についてである。多くの場合、誰しもが自分の存在への不確かさから、不安や恐れを抱えてしまう事がある。私見ではあるが、自己の存在の希薄さ、虚しさ、無価値観を味わえば味わう程、自己の存在の役割が強調されていくのではないかと考えている。自己の存在を、誰も理解してくれないと感じれば感じるほど、自己の存在理由が突き付けられるのではないだろうか。だから無意味だ、無価値だ、欠けていると感じても、その存在の軽薄さを味わい切る事だ。その先に、自己の本当の存在の役割が待っている。仏典では次のような記述が残っている。シャカ国は隣国コーサラ国の大軍に攻められ滅亡した。釈迦はその時点でのコーサラ国の国王であるヴィドゥーダバ王の相談役でもあった。3度、侵攻を止めたが4度目はその侵攻を止めずに、祖国を失う事になる。多聞第一と云われたアーナンダに、釈迦は次の様に想いを伝えたという。国を失った者ほど虚しいものはない。アーナンダも私も根無し草だ。もう帰る場所がないのだ。根無し草は干支で表現すると1番干支の甲子である。地支が水だから根が張れない。だから常に変転変化し移動し続ける浮き草を意味する。根を張る場所がないから流れ着いているその場所が、自分の居場所である。この在り方が商売の根本であると説いてもいる。帰る場所があると思うな。今ここが自分の居場所で、今ここで出来得る最大限を必死で生きるからこそ、商売は成り立つのだ。だからユダヤ人は商売が上手い。帰る場所がないからだ。根無し草の者は「カエル故郷がない」から、今この瞬間を生き抜くしかないのだ。その在り方が、その者の存在を際立たせ、輝かせるのだ。

2019年8月のレジュメ「欠けている事」を覚えているだろうか。問答は宿題でもあった。ここでその要約を振り返ってみよう。空思想は中庸を説き、絶対的な世界観で物事を観よと説いている。世の中の全ての事象は移り変わり固定的なものは一つも存在しない、諸行無常の世界である。良い意味で何でもありだと「受け入れる」事が出来る、積極的なものの見方である。全ての事象は移り変わるからこそ、変化を受け入れ、その時点で与えられた環境や状況を肯定的に味わうことこそ、全てが満たされることであると換言できる。この相対的な世界から、絶対的な世界に移行した時、「長所と短所」と云う価値も大きくシフトしていく。「短所＝欠点＝欠けている」という概念が、「欠けていると捉えている部分＝自分の特徴、長所である」と変化するのだ。私たちは、不完全な状態(欠けている状態)で生まれ、不完全な状態で死ぬ。その不完全さに気が付いて、不完全さを埋めようと努力して生きている事が多い。つまり不完全ではダメだと勘違いしてしまうのだ。不完全な存在のままでいいのだ。人間は元来、欠けている存在であり、その欠けている部分が個性になる。欠けている部分を埋めたら、その個体の個性が無くなるではないか。欠けていいのだ。欠けている事こそ、個性であり、今世の存在の役割の起因となるのだ。だから人間は地獄を味わったとき、とことん、欠けている自分を突き付けられ、初めて自分の生きている意味を知るのだ。または実力以上の地位に立った時、自分の力量の無さをとことん突き付けられ、その高みの領域で欠けている自分を突き付けられ、謙虚にならざるを得ないのだ。劇作家の寺山修司は次のような言葉も残している。「悪口においては、常に言われている方が主役であり、言っている方が脇役であるという宿命がある」。陽転者は一般社会通念で云う欠点を埋めることなく受け入れ、磨きをかけたからこそ、長所として輝き出し、他者から必要とされる存在になった人を云うのではないだろうか。そんな一例を挙げる。一休宗純は名僧として名を残しているが、彼はおよそ破天荒な人生を歩んだことで有名である。酒を飲み妻帯し、愛人もいた。しかしそれは悟りを得た後の言動であり、悟りを得るまでは、苦悩しながら真面目に修行に励んでいた。そんな破天荒な彼が、悟りを得たプロセスを考察してみよう。



京都の大徳寺の高僧、華叟宗曇(かそうそうどん)の弟子となる。『洞山三頓棒』という禅の公案に対し、「有漏路(うろぢ)より無漏路(むろぢ)へ帰る 一休み 雨ふらば降れ 風ふかば吹け」と答えたことから、華叟より一休の道号を授かる。なお「有漏路(うろぢ)」とは迷い(煩惱)の世界、「無漏路(むろぢ)」とは悟りの世界を指す。一休はこの命題に取り組み、長い月日、悩み苦しんでいた。ある時、平家琵琶の『祇王と仏御前』の条を聞き、一晩泣き明かして、ようやく解けたのだという。さて一休は、何をどう悟ったのか。この公案に対して一休は「有漏路(うろぢ)より無漏路(むろぢ)へ帰る 一休み 雨ふらば降れ 風ふかば吹け」と答えた。その意図は何か。みなさんは、どう考えるだろうか。



正岡子規は「悟りとは平気で死ぬ事ではなく、平気で生きる事である」と心境を述べている。どんな存在であろうと、不完全な存在なのだ。つまり欠けているのだ。欠けている部分の無い存在は存在しない。その自他の欠けている部分を如何に受け入れ、目を背けずに磨いていくかで、陽転するかしないかが決まるのではない。欠けている部分は目立ってしまう。その欠けている部分が、肯定的な輝きを放つようになるまで、基礎の反復練習を如何に積み上げていくかが大切なのではないだろうか。欠けていることへの認識が変わると、今見えている世界が変わってくるはずである。この欠けている部分は、陽転していく事の起因となると考えることが出来る。すると生きている意味、生き甲斐が感じられてくるはずである。その生き甲斐が、仕事で成果を創り出すこと、つまり人のお役に立つことに結び付いている。人のお役に立っているとき、はじめて生きているという実感を得ることが出来る。人のお役に立つお役目を頂く機会を体験する事が、自分が生きている実感を味わい、自分の生き甲斐に直結していく。欠けている自分の領域を見つめると、痛みを伴うこともあるだろう。しかしそのプロセスは、他者が抱えている痛みを理解する練習にもなる。自他の痛みが理解できている者は、他者の感情を理解できるので、他者に寄り添うことが出来る。その寄り添ってもらえた者は、理解された、味方になってもらったと感じる。秘伝書の中には、次のような格言がある。「人生の生きる目的は他者から喜ばれる存在になる事」、また「人生とは、出会う人すべてを味方につける事」とある。自他の欠けている領域を受容し、今この瞬間をただただ在るからこそ、人生が陽転していくのだ。欠けていることは、豊かなのだ。欠けている存在である事こそ、意味があるのだ。欠けている自分でも、その存在そのものに価値がある。役割の存在とは、存在する事そのものなのだ。

ここまでが8月のレジュメの振り返りだ。どんなに欠けていると思っていても、その存在そのものに意味がある。存在しているだけで意味があるのだから、何かが欠けていると観るのはズレている事になる。どんな様に観えても、生きている存在そのものに意味があるのだ。有能でアルかナイかは、重要ではないのだ。つまり相対性の比較の世界の中に居ると、他者と争い、優劣が起こる。絶対性の唯一の世界の中に居ると、全ての根源は一つなのだから融合して調和が起こる。陰陽五行論は絶対的な存在で在れと説いているのだ。その在り方を生きた者の元に資源が集まり国家(会社、家庭)形成を豊かに構築できると教えてくれている。あなたはどんな存在で在るのだろうか。